

発達障害：成人期の自立を目指す

平岩 幹男

Rabbit Developmental Research

【はじめに】発達障害は脳の機能的障害として、行動やコミュニケーション面での社会生活上の困難を抱えることが多い。その中では自閉症スペクトラム障害（スペクトラムなので症状も知的レベルもさまざま）、ADHD（注意欠陥・多動性障害）、特異的学習障害（読み書き障害を呈するディスレクシアが最も多い）などが主なものであり、周辺領域として選択性緘黙（状況によって話すことができなくなる）、トゥレット症候群（多発性のチック）、発達性協調運動障害などがある。

【自立ということ】発達障害を抱えていてもいなくても、多くの子どもたちは成人期の自立を目指す。障害のために自立が困難な場合でも、成人期にどのように安定的な生活を手に入れるかを目指すことになる。自立とは何でも自分でできるようになることではない。あいさつや身の回りのことなど、基本的な生活習慣の獲得や、生活していくための収入を得ることは重要な因子であるが、社会生活ではさまざまな困難に直面することもあるので、自分の所属先や困ったときの依存先をなるべく増やすことと、いざというときにそれが使えるようになるためのコミュニケーションスキルの獲得、そのためのトレーニングも必要になる。

【好きなことを見つける】子どもたちの才能はいきなり見つかるのではなく、好きなことを探して、見つけて、はまっているうちにそれに子どもたちが自信を持ち始めることから才能として育てていくことが多い。ということは子どもの時代にさまざまなことに挑戦していくことが、できることを増やすとともに才能探しにもつながる。将来の職業的なイメージを思春期以降には鮮明にしていくことも課題になってくるが、子どもたちは知らない職業は選べないので、やってみたい仕事にはどんな種類があるのか、それを実現するためには何が必要かなどを探し、考えていくことになる。

【自立に向けたトレーニング】苦手なことに対する対処法は、それを上手にこなせば「ほめてもらう」ことだけではなく、不適切な行動に対して「叱られたり注意されたり」してしないことを学習するよりも、不適切な行動をがまんすることを「ほめられる」という方法のトレーニングも役立つ。いずれにせよ子どもたちの時間は20年しかない。その間にできることを獲得して、その後の長い成人期へとつなぐお手伝いをしていきたい。